愛珠

想い出ずるままに（八）

中村道子

一　大阪大空襲の前後　その一

昨年末から、敵機来襲は毎日のようにあったが、いずれも小規模の空襲であったから、その位の程度と思い、不安の中に、安慰な気持で、昭和二十年の新しい年を迎えた。

戦時下であり、印だけの小さい門松を左右に打ちつけて、祝賀式を行なったが、警報も聞かずに済み、翌二日も安泰であった。

嬉しくほっとしている翌日、警報が発令され、「あっ!!　また始まったか!!　幼児は冬季休暇中で来園して居なかったから、よかった」と思いながら、約束の通り、職員全部は出勤して待機したけれど、何ら変わったことなくすんだが、この日から、日によって時間は異なっていても、毎日のように発令された。

―大阪南方阿部野昭和町と、東部の布施市足代(あじろ)附近の空襲の時、共に愛珠幼稚園からは、相当の距離があって、この物音は聞こえなかったが、両方合わせて三百六十余発投弾されたそうだった。しかし全部不発で、皆田圃や、工場の敷地に落下したもので、地面に穴をあけただけで、焼夷弾の恐怖とは、比べものにならなかったそうである。私はやれやれよかったと、つくづく思ったこともあった―。

三月一日には、市役所に近い本園愛珠で、専任園長会が開かれ、石川学務課長をはじめ、係長や幼稚園の担当視学等出席の下に、空襲に備えて、幼児の避難と園舎の防備につき、特に種々の注意と、全幼稚園の連絡打ち合わせがあって、一層重大なる注意の要すべきことをいわれると共に、一方仕事柄、幼稚園の遊戯や唱歌、談話・手技等の研究の件もあって、これらの合間を縫って研究会も開かれていたので、習慣的に気分はのんびりしていた。

三月六日の地球節には祝賀に合わせて、雛祭を行ない、例によって一同にお祝いとして、振掛粉をほどよくまぶしたあまり大きくない小判型のおにぎりを、馬鈴薯の吸物と添えて出したが、それでも子どもらは大喜びであった。出席児は昨今二十一名に減じ、従来に比べて非常に淋しい思いであったが、幼児は平時と変わらぬ元気であったから、嬉しく思っていた。しかし、神ならぬ身の知るよしもなく、この日の三日後に、終日警報が発令されていて、最も恐れていた東京都が、大空襲を受けていたのである。

忘れもしない九日と十日!! ただ茫然と手を拱き、歯をかみしめて、種々に想いをはせた。

目を閉じ、周囲の物音に鋭く耳をそばだて、そしてまた、両手を堅く握りしめて、取るべき手段を考えながら、あれこれ思いをめぐらせた。

次いで十一日と十二日に、敵機は名古屋市を襲った。——ここも東京都と同様恐怖に包まれていることだろう、皆苦しんでいるだろう——、われわれは如何することもできない残念だ!!

私は重要書類を山口さんへ早く疎開させていてよかった、自分の健康の続く限り、未だ残っている物を、余さず持って行こう。昔の珍しい遊具や、茶道具類、現職員関係の帳簿記録等、重要書類といわれている物は、全部持って行こう。避難の時に職員の荷物が重くて、活動ができなくなって、怪我をしては申しわけないから、重要性の軽重を考慮して、疎開の順位を定め、少しずつ運ぶことにしよう。

宿直者は、一食分の食糧と、幼稚園の要所の鍵を一括して持つこととし、私は西田さんから受継いだ、預金通帳と印鑑を離さず持って避難することとした。そして市役所から配給された大きい袋はやめ、遠足の時に持参する背嚢を使用することとして、活動が自由にできるようにし、この際、物を惜しみ、欲を出さないことを、懇々と注意したのである。そして互いに気をつけて、怪我のないようにといって、その日は別れた。

この日宿直は広瀬校務員であったので、「今晩ブーが鳴ったら、飛んで来るから、背嚢を背負って、ラジオの前で、状況をじっと聞いていてちょうだいや」と、笑いながら念を押し、「そうそう西六はおばさんが一人やったから、一度尋ねてあげよう」と、ダイヤルをまわすと、直ぐおばさんの声が聞こえ、「おばさん今晩は!!」「誰かと思うたら、先生!! あんただしたか、東京も名古屋も、えらいことだしたな!! 大阪も来まっせ、先生!! 気い付けとくなあれや」「大きに!! おばさんも気をつけてちょうだいや」「ゆんべから、おっちゃんと交替しましてん、明後日まで一人でんねん、平常のように畠の仕事で、私が続けることにしましてん」「そうご苦労さん、あんたは気丈なから大丈夫やけど、頑張ってやってちょうだいや。そやけどブーが鳴ったら、早よ逃

げなされや、愛珠より西六の方が家が建て詰まっているから、早よう逃げんと、逃げおくれたら、えらいことになりますで、気を付けなさいや」「おおきに西六も防空壕を掘りましてん」「どこへ？」「遊動円木の柱と柱の間でんねん、上から物が落ちてきても、鉄の脚が前後にあるよって、それで支えられて用心がええと皆がいいはるし、私もそう思うて掘りましてん」「そうよかったわなあ!!」「先生も頑張っとくなあれや」「おおきにそんならおやすみ!!」電話を切って、私は田辺の家へ帰った。

家へ帰ると、裏の縁の硝子障子を開け、最近強制疎開をさせられた、家守の老人夫婦の家も借り、壁を毀って続けたから、庭が一層広くなって、勢い大空も広く見え、北斗七星をよく見ることができ、北極星までも判然見えるので嬉しかった。附小時代から大好きでよく歌った、星の歌を口遊びながら、楽しく庭の整理を考えていた、―月なき御空に煌めく光、ああ、その星影希望の光、―人智は果てなし無窮の彼方、ああ、その星影極めぞ行かん。声は高く低く、また細く太く続いて、真実に嬉しかった。節も大好きでよく覚えている。粗末な夕飯をすませ、夜も更けたから寝に着いた。

一眠りした時、空襲警報を耳にしたから、私は飛び起きてラジオを聞くと、大変!! B29の大編隊が来襲して、大阪全市の空襲が行なわれようとしている。そのうちに桜島に焼夷弾が落とされ、間もなく西空が少し明かるくなったが、時を移さずその周辺が、褐色をおび、一瞬の間にぐっと高く広がって明かるくなり、下の方は赤く、続いて褐色に、だんだん水色から白色になって、満月の光を浴びているようだ。今まで何も見えなかった物がよく見え、家の中までよく見えた。

全体が罹災の最中で、ラジオは刻々とその状況を報じ、〃罹災地の方々は、不屈の精神で何卒頑張って下さい〃と、力強くいっている。赤くなって来た大空に、時々火花が散ったように、ぱっと真紅に染めて、手前の方へ広がってくる。ラジオによると、今、西区から南区の方へ延焼して、猶、西南の浪速区の方へ、ぐんぐん延びて行くらしい。敵機の編隊飛行の爆音は、だんだん耳に強く響きながら、東方へ小さく消えて、それが何度も繰り返されたのである。

その頃には、港区や西区は大分下火になって来たらしいが、火熱の中での市民の動きを想像して、気の毒で仕方無い。永らく新町にいた私は、西六校園下を思い、山本のおばさんを案じ、生徒たちやその父兄を偲び、それとあわせて、一刻も早く愛珠幼稚園へ行きたいと思った。考えれば考えるほど一途に思った。

交通機関は全部不通であり、徒歩すべき道路は、現在空襲の罹災中にて、火焔のため通行は不可能であったから、折を得て早く

行きたいとあせり、ラジオから耳を離さず、ただその無事を祈るばかりであった。

広瀬さんは如何しているだろう。都合よく逃げてくれたかしらん、矢も楯もなく気がせいた。歩くとすると、南海平野線に沿って天王寺駅へ出て、それから愛珠へ対角線をとって歩こう、と考えていると、近所で誰かが「今恵美須の駅が燃えている」といっている、ああ恵美須も燃えたか!! なさけない!!

この頃、東方の空が少し白けて来たから、私は早速出勤の支度をしていると、ラジオは漸く敵機の尾鷲脱去を報じ、猶、余燼の盛んな個所を知らせている。

「電車は平野から恵美須まで行くけど、駅のホームの屋根や、改札の辺は焼けてもう無いが、運転はできるそうや」と前方を行く人がいっているのを聞いたから、よく分からないが、兎に角股ヶ池の停留場へ出ることとした。

家を出る時妹に、「今日は帰って来んかも分らんけれど、心配せんといて、この辺へは爆弾は来んけれど、火事に気をつけなさいや」といって、家を出て停留場まで行った。

家から停留場の間には、割合空地が多かったから、この点では少し安心だった。ちょうどこの時、遠く東方で微かな電車の響が聞こえたから、電車の来ることを知って、助かったと嬉しく思った。股ヶ池停留場で暫く待っていると、向こうから小さく電車が見え、一番電車らしい、恵美須町行きは確実だったから、真実に嬉しかった。やがて飛び乗って、思わず「ありがとう」といった。天王寺まで歩く積りが、恵美須町まで乗せて貰えるかと思うと、嬉しくて合掌したいような思いであった。

恵美須に近くなると、被害が次々に目にはいって、恵美須町の停留場は、昨夜見た姿は哀れに変わっていた。近所の誰かがいっていたように、ホームの屋根は無く、鉄筋の処は漸く型だけ残っていた。あっ何とこの姿は!! 停留場は元より、平素賑やかなこの大衆的な歓楽境は見る影もなく、今も尚所々燃えている、昨日と変わり果てたこの形相に、立留ることもなく、私は先を急いだ。

愛珠へ行くのにはこの堺筋が一番よい。道幅も広いし、電車道に沿って今橋筋へ出て曲ればよい。人通りも多いらしく、人々のいっていることを聞くこともできると思うと、足は直ぐ堺筋を北方へ向かって歩き出した。小半町程行って、ちらと右を向くと、眼の前は一面焼野原になって、突当って石垣、即ち上町高台の石垣が判然見え、石垣の上にあった大きな伽藍が、赤い焔となって硝子障子に映り、それが見る間に、共に一しょになって、盛んに燃え出し、瞬間、あっ美しい!! と感じ、その後から無念と思った。——今思えば逢坂に近い、南寄の石垣の上にあった、大きい伽藍は清水寺だったかしら——、こうした姿ははじめて見たが、我に帰った時、何という愚な戦争だろう!! 幾百年の昔から、人

智と物の総合で、建築されているものを、一瞬に壊滅させるとは、何という愚なことだろうと思って、敵を哀れんだ。

尊い物は金銀宝石のみならず、それにも増して人の心の結集は、尚尊く強く恐るべき力のものであること、永遠なるものであることに、気付いてほしかった。米国は学問を尊ぶ国と聞いていたが、学問ばかりでは、車は通れない、現実の学理と、永遠の真理と、融合合致したものでなければ発展はない。焼燻ぶっている熱気を両頬に感じつつ、そんなことを考えながら、日本橋五丁目の電話局まできた。

この建物は学校を改築したもので、南側の空地の電柱から、コンクリートの壁面へ、たくさんの電線を引入れていたが、昨夜の戦焼で皆焼け切れて、切れ切れになって、碍子をつけたまま垂れ下がり、風の吹くたびに、電柱や壁面に当たって、瀬戸物であるため、軒場の風鈴のような音をたてて、何ともいえぬ淋しさを感じたが、ここを通る時には、顔が火照って思わず両手で頬を押さえて走って通った。

ここでこの位熱いから、これから先はとても北へは行けないだろう、しかし、どの道を通っても同じようだから困ったと思案しながら、それでも北方へ歩いている時、足は知らず知らず西側によっていたが、大きい家があるとまた熱かった。松坂屋に近づいた時、未だ三丁目位かと思うと、この前方に要する時間が思いやられて、また思案をしている時、少し前を行く二人連れの人の、「早よう地下鉄へ行こう」といっている声が聞こえたので、不思議に思い、思わず走って行って二人に尋ねると、運転しているといったから、嬉しくて飛び立つ思いで、三丁目から西へ曲って、難波駅へ出た。

広い御堂筋を挾んで、東も西も共に一面に罹災し、高島屋百貨店だけ高く七階まで続いているが、内部の状態は分からない。この地下を利用して、電車が走っているのだが、私は地下鉄のあることを考えもしなかった。動いていたとすれば、天王寺駅から乗ればよかったのにと残念に思ったが、でも難波で分かったことは未だ幸いであったと喜び、大急ぎで改札口へ走り、愛珠が残っていてほしいと、祈念せずにはおれなかった。

改札口からホームへ降りた時には、種々な形の荷物を持った罹災者がおおぜいいて、非常に混雑していた。とにかく次の電車に乗って愛珠へ着かねば、不安でたまらない。いらいらする気持で電車を待っていると、やっと来たので、最後の列車に飛び乗り、中央に行ってそこにいた人に、「船場は全部焼けましたか」と尋ねたが、その人は知らなかった。二、三人に尋ねたが、皆知らなかった。

順慶町は焼けたと前方の人が話しているのが聞こえたから、それでは心斎橋筋も焼けたろう。誰かが北御堂も焼けているといっ

たから、この話では愛珠も焼けてしまったろう。広瀬さんは何卒うまく逃げていてほしいがなァ!!——そうだもう尋ねずにいよう——それより早く愛珠へ着き、それぞれの処理を、適当にせねばと決心した。電車が本町をでたから、直ぐ淀屋橋に着くと思い、人込みを押し分けて、最も後の入口まで行き、車掌に「今橋は駄目ですか」と尋ねると、「平野町までは焼けていません」との返事に、蘇生の思いをして、心から嬉しかった。

淀屋橋に着いてドアが開くと同時に電車を飛び降り、走って階段を登り、出口へ急いだが、寂として何の音もしない、周囲は鎮まり返って、今までとは大変な違い、今朝から通って来た道は、それぞれ違った喧噪を感じたが、ここは特別に静かであった。何も無かったように、家も、ビルも、整然とし、人通りもなく、静かに建っている。—ああ、助かった!! 広瀬さんは助かった、それにしてもさぞ心配したことだろう!! 私は早速愛珠へ向かった。

幼稚園の正門が左右に開かれていたから、急いで門をはいると、バケツ一杯に水を入れ、門内の石畳の上に散って来る、焼埃に水をかけながら、私を見て笑っている。広瀬さん!! 心配しなさったやろう、焼けなんでよかったわなァ!! ほんとによかった。私は心配しましたで、自分が泊ったらよかったと思いましたわ、気遣いなさったやろう、大きにほんとにご苦労さんでした。それにまだこうして火の粉が飛んで来るとすると、夜中にはたくさん来ましたやろうな!! 私は矢次早にいった。広瀬さんは静かに笑いながら、「来ましたで」といっている。身体の大きいおじさんは、どっしり落着いて頼もしく見えた。「なァ広瀬さん、本町が焼け、備後町や瓦町に火が来た時は、たまらんと思いなさったやろう!! あんたに怪我が無うて第一良かった!!」おかげで幼稚園も残ったし、真に結構でした。暫く昨夜の状況を話し合っていたが、広瀬さんも中々緊張して、よく幼稚園を守ってくれて、ありがたく思ったのである。

空襲の後では、市役所の教育局へ、報告をすることになっていたから、調査を始めると、東区の大部分が罹災していたけれど、幸に愛珠区内としては小部分であり、罹災区域には民家より、会社関係の建築物が多かったことが幸であった。

今回の空襲で、東区内の罹災幼稚園は、集英を始め、汎愛、浪華、久宝、船場の五か所で、幼稚園では愛珠だけが残り、学校は愛日と集英の二校で、罹災以外の学校長や、平沢視学他三視学も来園せられ、懇篤な見舞を交々いただき、尚激励されてありがたく思った。昨夜は全市の三分の二が焼土と化したそうだが、職員使丁は皆無事であって、よかったのだが、園児中数名の家庭が、罹災したことは残念であったけれど、皆身体には異常なく、家族と共に、避難していたことは、不幸中の幸であった。

運命は、あしたを知ることはできない!! 愛珠は、今回は難を免れることができたが、明日は分からない——。この日三時過ぎ、調査を一応まとめて、教育局へ持参した時、三階の窓から西方を見て、悲しい姿に変わった大阪市を見たのである。涙が何度もにじんで来た。

三月十四日から全市校園は、青年学校まで休校となり、卒業式や修了式は中止し、その証書は各自出校園者に、手渡すことになったから、この通知を各家庭に持参すると共に、後援会役員宅を見舞い、あわせて園の無事を報告した。——その後詳細調査の結果、園児は、全部無事に避難せしことを確認したので、非常に喜ばしかったし、次いで三日後には、職員全部の各家庭も、無事であったことが判明したので、一同は互に慶びあった。

いい難い苦難をやっと切抜け、一同の無事を窃(ひそか)に喜んでいる時、松原致遠先生から葉書をいただいた。見ると空襲の見舞で、安否を気遣われ、苦難を超越するようとの、激励のお言葉であったから、素直な気持で、心中に固く決するものがあった。そして「ありがとうございます」と、先生のご親切に礼をいい、あわせて職員等にこのことを知らせてから、備品整理を続行し、運搬の分類が大体終わってから、やっと休憩した。

空襲以来、私と広瀬さんは二日交替で宿直をした。主席保母は病欠であったし、奥井使丁は家事の事情でできなかったが、日々幼稚園へ出勤して貰ったから、毎日の事務処理には、少しも差支えなかった。

月末に、松原先生が、久し振りに来園せられ、幼稚園の状況や、園児と職員の様子を尋ねられたから、有のままを話したら、非常に喜んで下さった。昨年五月以来、毎月二回講演に来られ、視学の会の時には、時々私も伺っただけだったが、今日なされたお話で、一層そのご親切を、ありがたく思ったのである。

四月にはいって早々、先生から二回目の葉書をいただき、今回愛珠が罹災を逃れ、且つ職員も無事であったことは、運命の然らしめたことで、偶然に逃れられたので、葉書のお言葉では、却って恐縮し、穴へはいりたい思いがした。

も早、新年度を迎えているが、新入園児を見ることもなく、毎日空襲に備えて暮し、真に味気無いものであったが、このたび、汎愛と久宝の二園の主席保母が、今後毎日愛珠へ出席して、事務を執ることになったから、園内に賑わいを見ることができ、嬉しく心強く思った。

幼老者と建物の強制疎開が、十一月に命ぜられたので、このために起こる、疎開者の荷物の買上げの会場として、本園が貸与を命ぜられ、高島屋百貨店が買上げることになり、十二日から三日間、毎日荷物が搬入せられた。主として建具類で、箪笥や戸棚も

あった。また売りもした。

買手の中には、三月十四日の空襲で、罹災した人も多くいて、服装はまちまちで、男子は国民服、女子はモンペを着て、中には身に合っていない人もあったが、誰も不思議にも思わず、そんなことを注意して見る人もなく、何時如何なる、苦難が降りかかって来るか、明日の分からない、お互いであった——。

東区警察署から、防空要員の配給米の指令を、受けることになったから、私は貰いに行ったが、結構なことと安心をした。このたびの空襲で全市にあった八十有数の幼稚園の保母や使丁は、それぞれ役所の事務を手伝いに行くことになったが、愛珠は、皆教員の有資格者であったから、郷里に疎開する学校へ転勤したり、良縁を得て退職したが、主席保母は病欠であったため、使丁二名と自分と三人で、管理することになった。幸に汎愛と久宝の主任保母が、来られたので十分であった。

今回の空襲の結果、北浜一帯と、中ノ島の二丁目辺まで残ったから、この辺の住民たちは、「この辺は大きいビルが建並んでいるから、今度は爆弾でしゃろう」と、噂した。私も、今度は今日までより、一層強烈に空襲して来るだろうと、覚悟をし、残っていた重要書類と参考資料を、背負えるだけ背負って、再び奥井使丁と二人で、桜井谷へ持参した。

モンペ姿の二人は、ズックの靴を履き、大きい荷物を背負っていたから、山口夫人はこれを見て、頭の先から足の先まで、見上げ見下ろして、「かわいそうに!! こんな姿で荷物を負うて来はって!! 普通やったら車で来はる人が、雑魚売りのおばはん見たいな姿して来はって、涙が出て来るわ——」と、暫くじっと見詰めていた。「山口さん! そんな処やおません、今日は留守番を、汎愛と久宝の先生に、頼んで来てますよって、早よ帰らんと、あの人たちがおそくなりますが、皆が、今度は爆弾やというから、これもまたお願いしますわ、今日はこれでご免を蒙ることとして——なあー奥井さん!!」

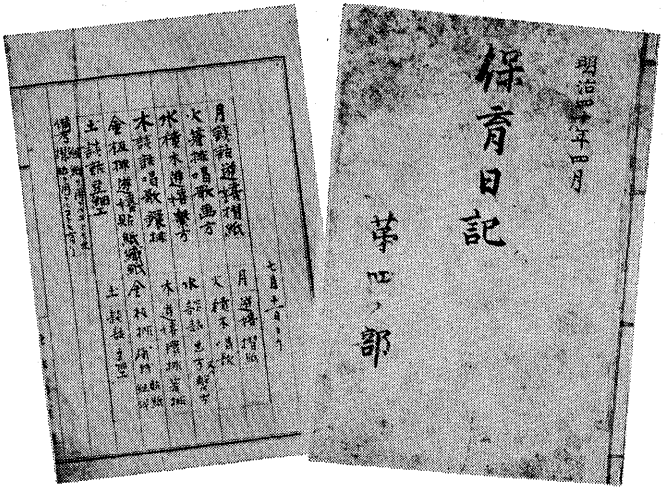
電車の中のことを想い出しながら、「電車の中で、二人はあっちへ当たり、こっちへよろけて、えらかったわなア——奥井さんもご苦労さんやったわなアー」といながら、倉の方へ行って荷物を詰めた。「何でも持って来てちょうだい、まだまだはいりますで!! そやけど先生は、身体だけには、気をつけとくなされや!!」今日は座敷には上がらず、玄関でお茶をたくさんちょうだいして、急いで幼稚園へ帰って来たのである。二人の先生は、機嫌よく待っていて下さったので、ありがたく思った。

留守中には誰も来ず、警報も鳴らず、荷物もたくさん預けることが出来て、実に嬉しかった。

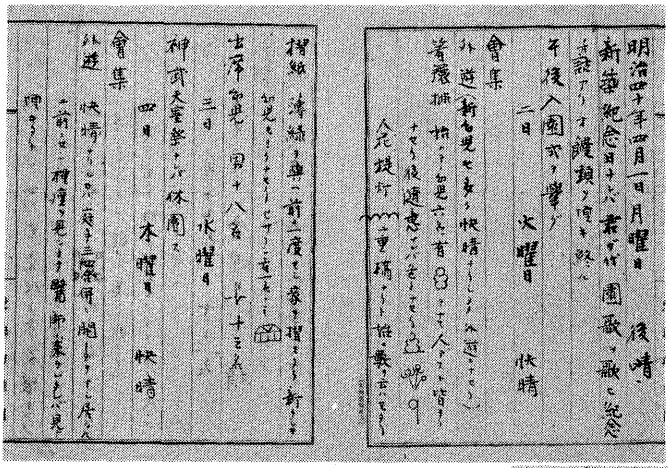
（元愛珠幼稚園）

愛珠・写真集

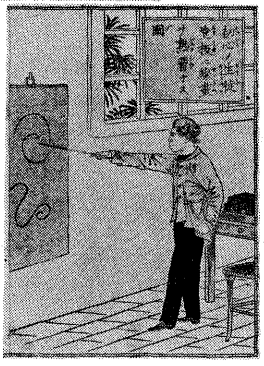
明治四十年度の保育日記

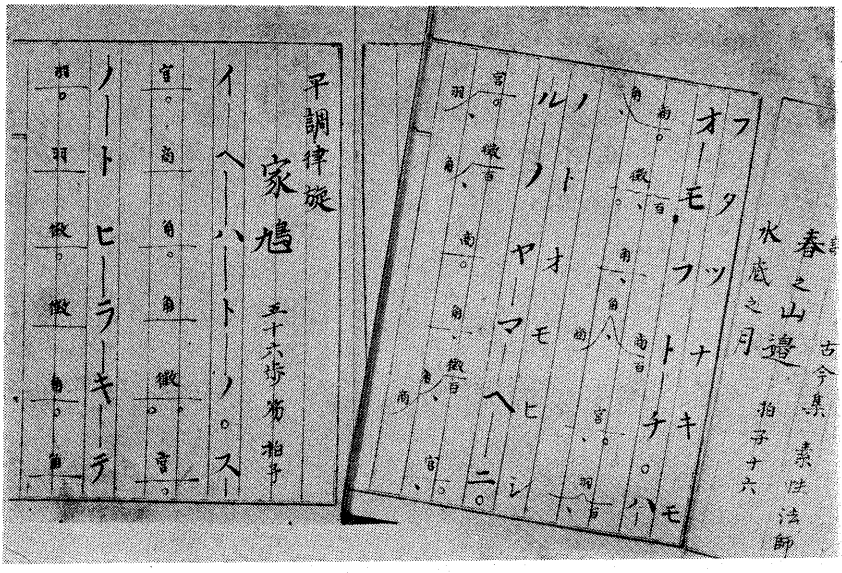


明治四十年度の日々の保育予定

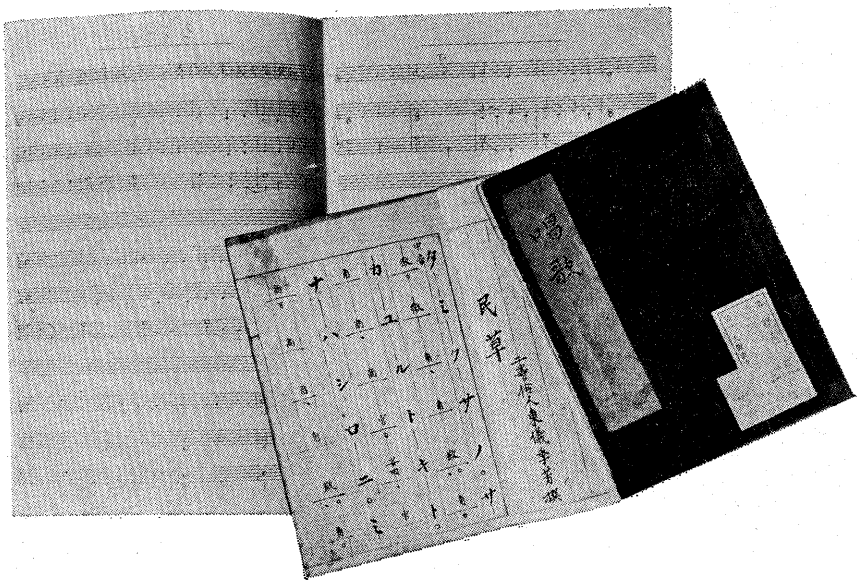


（下右）描き方
（下左）小図を大図に複写する法





幼稚園創設当初の唱歌「家鳩の歌」と音名



幼稚園創設当初の唱歌「民草の歌」と音名